海中の自然保護

山田幸男

テツリアナメ（焼尻島産）

近年、海底公園というものを設けようという気運がさかんになって、先般、第十一回・太平洋学術会議が東京で開催された際にも、そのため特に一つの特別なシンポジウムが組織されて、大勢の外国からの生物学者などもこれに参加した由は、すでに新聞紙上などでも報ぜられた。

まことに近年、陸上の自然が種々の理由のために破壊損傷をこうむることがいちじるしく、その対策がいろいろと論ぜられているが、それと同じ趣旨を海中へもおよぼそうということは、まことに結構なことである。もっともわれわれの先輩は、海中における天然記念物の指定保護という点には早くから考慮を払っており、すでに大正十一年三月、島根県

隠岐島における海産緑藻の一種、クロキヅタが天然記念物として指定されたことでも明らかであろう。

しかしその後、淡水産藻類ではスイゼンジノリ、ヒカリモ、マリモ、チスジノリ、オキチモヅクなどが国の天然記念物として指定を受けたが海藻としては上のクロキヅタ一種のみに限られているのみである。

なお筆者はこの夏、前記太平洋学術会議に参加した藻類学者などとともに、神奈川県江の島へ海藻の採集を行なった。江の島はわが国海藻学の発達とは切っても切れない関係をもった場所で、わが国海藻学の父といわれる故・岡村金太郎先生、ならびにその門下生達が研究発表した多数の新海藻の原産地として、世界で有名な場所である。

とくにその東南側の元の漁師町一帯の磯は、非常に好い海藻の生育地であったのであるが、先年オリンピックが開催された際に、そのへん一帯が埋め立てられて、いわゆるヨットハーバーと変わってしまい、昔の姿は全くなくなってしまった。

これと同じようなことは、沖縄においても方々で見られる。筆者は約三十年前頃に、琉球列島の海藻をしらべるために那覇付近を入念に採集調査を行ない、当時一漁村であった泊(トマリ)の付近でカサノリ類、その他の熱帯性の海藻を採集し、数種の新種を命名記載したものである。

それから幾年か経て戦後、鹿児島からの便船で到着した那覇港は往時の泊(トマリ)の地であって、カサノリ類の珍種の原産地はもはや埋め立てられ、昔日のおもかげは全く見るよしもなかった。このようにして海中といえども、人間の都合によって自然はいつ破壊されてしまうかわらない。

§

それであるから、これを防ぐことを早くから考えておく必要があり、それにはいろいろな方法があろうが差し当って北海道としては本道沿岸においてとくにいちじるしい自然的価値を有し、その破壊滅亡を防がねばならないような大切なものと、その所在を明らかにしておく必要があるのはもちろんで、その一例としてここには、まずテウリアナメという褐藻類の一種をあげておきたい。

一体アナメ類という海藻は広い意味のコンブ族の一員で、その体はち

ようどコンブの葉の部を短かくしてまるくし、そこに多数の小孔をあけたようなものであって、北太平洋沿岸に分布するものである。

近年まで世界にただ二種しかないとされており、そのうちの一つである

アナメ(Agarum cribrosum Bory)

は、広く太平洋の亜寒帯、寒帯の海に産し、わが国にも北海道などに比較的普通のものであるが、他の一種

Agarum fimbriatum Harvey

というものは北太平洋のアメリカ側にだけ産するもので、とくにワシントン州の沿岸に多く生育している。

ところが比較的近年になって、新しく他の二種がわが沿岸から追加され、そのうちの一種がこのテウリアナメ

(Agarum yakishiriense yam.)

で、他がオホノアナメ

(Agarum oharaense yam.)

である。

このうちテウリアナメは、名前の示すとおり天売、焼尻の両島にのみ産し、他の地区からはいまだ知られていない。普通のアナメの茎がつねに直立しているのに対し、この種では茎が下部が匍匐状で平たく、その両縁から多数の細い根を出して岩などに附着しているので、容易に区別される。

大体、低湖線下四～五m辺の岩上などに附着して生育しており、水上からは見がたいが、夏期以後となると両島の沿岸諸所に波浪などによって岩から離されたものが海岸に毎年多数打ち揚げられる。

幸か不幸か、この類は食用とはならないので、とくにこれを採取する者はないので、ワカメやアワビ、ウニなどのように乱獲のため滅亡することはさしあたって考えられないが、築港工事、その他、海岸埋立などの場合には、じゅうぶんに気をつけておくことが必要であろう。

(北大名誉教授)